
炎に照らされる星

阪野隆平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎に照らされる星

【Nコード】

N5276I

【作者名】

阪野隆平

【あらすじ】

湖の畔で再会した魔術師と魔法使いは——（この作品は、某大学で発表した作品に、加筆修正をしたものです）。

（前書き）

久しぶりの阪野です。まだまだ未熟な部分もあるでしょうが、感想を貰えると嬉しいです（11月23日追記：加筆、修正しました）。

明るい陽光に照らされた湖のほとりに、質素だが手の込んだ屋敷が一つ建っていた。屋敷の一階のテラス。そこでコーヒーを飲む、ある一人の男がいた。

燃えるような長髪の赤毛に縁なし眼鏡の下の顔は知性に満ち溢れ、まるで学者のようだった。しかし、その瞳は猛禽のように鋭く、近寄りがたい雰囲気纏っている。コーヒーの香りを楽しんでいる今は目元も緩んでおり、普段よりは親しみやすそうではあったが。

少し強い風が吹くと微かに湖畔が揺れ、男の髪もそれに応じて柔らかに動いた。コーヒーの薄い湯気も風と同化し、自然と混ざる。

「ここにいたか、フィーニクス」

ちょうどその時、背後から声変わり前の少年特有の高い声が長髪の男——フィーニクスの耳に入ってきた。

「ああ、デカラビア。久しいな。一体どうしたのかね」

囁くような声量だが、声自体が澄み切っているためか、デカラビアと呼ばれた少年には問題なく聞こえた。

「一体どうしたのかね、じゃないだろ、フィーニクス。お前が大切な話があると言うから、わざわざ時間を割いて来てやったんじゃないか」

不機嫌そうに唇を尖らせる少年の格好は、これまた一風変わって

いた。

黒革のジャケットに、銀製の星形のアクセサリーをほとんど隙間なく付けていたのだ。頭に被っている黒い帽子にも同じように銀色の星が散りばめられており、愛らしい部類の顔の左頬に、黄色い星形のペイントまでしてある。

喪服のような黒いスーツを隙間なく着たフィーニクスが呆れたように言う。

「相変わらずの格好だね。宇宙神にでもなりたいのかい」

「宇宙神……ああ、それもいいかもな」

熱っぽく呟く少年の横顔を見ながら、フィーニクスはカップをテーブルに置いた。懷から煙草を一本取りだして口にくわえる。そして、指先からライターも無しに小さな火が揺らめいており、煙草の先を焦がす。

デカラビアはそれを見ても特に驚くことなく、フィーニクスの隣の椅子に座る。

腰を下ろしたデカラビアは「ところで」と言い、脱線しかかっている話の流れを戻す。

「何のようだ。まあ、お前のことだから、どうせくだらない事なのだろうが……」

「その通りだ。実は何もない」

悪びれた様子もなくフィーニクスは言った。デカラビアは「やつ

ぱりな」と小さい声で返した。

この男と会うのはこれで四回目だが、うち二回は特に用事もなく呼び出された。今回もどうやら同じようだ。デカラビアは気持ちを切り替えるように、目の前の男との会話に徹することにした。

「とりあえず、紅茶でどうだい？」

「ああ、貰おうか。砂糖は多めで頼む」

「容姿と同じで、嗜好は子供だな」

「ほっとけ」

フィーニクスは自分の右側のこめかみを指で押さえて、トントンと軽く叩く。すると、突然テーブルの上には小さな紅い光が発生した。そして光が止んだ場所にあったものは、紅茶の入ったカップだった。

「素早い術だな。羨ましいよ」

「慣れればどうってことない。練習してみたらどうだい」

「いや。無から有を生み出す術は苦手なんだ」

紅茶の入ったカップを取り、一口飲む。

フィーニクス。そして、デカラビア。

彼らは魔術師、魔法使いと呼ばれる存在で、彼らは自分たちを上^ア位種^{ンシエル}と自称している。本来魂のみの存在で、後述する『術』を駆使して新しい器を創り存在することで誕生する。

上位種の種類は三つ。

魔法使いは人以外のものが精神を持つ、俗な言い方をすれば精霊化することで生まれる。

魔術師は人が特定の物事を極めて、死後に英霊化することで上位種となる。

魔女だけ例外で、説明は省くが世襲制である。

『術』は大小様々であるが、そのどれもが人知を越えたモノである、ということが共通認識である。何もない場所から水を生み出すことから、技量があれば海を干上がらせることも可能である。しかし、使用するためには修行を超えなければならない。

『術』を使うには魂の本能に近い部分にある、通称『回路』と呼ばれる備えていなければならない。『術』の源は心で、使用するためには『術』の仕組みを理解し（技）、使用に耐えうる肉体（体）を有することが条件である。

新米の上位種にとってはこれらを得ることからが真の始まりで、しばらくは霊体の状態で過ごさなければならない。言い換えれば、これらを得ることが本当の上位種の誕生と言える。

完全に修行を終えた上位種は、人知を越えた『術』を駆使し、数多ある『世界』に干渉し、『歴史』を左右することさえできる。

今二人のいる場所——名を『間の世界』^{ヴァルハラ}と呼ぶ——は、上位種たちが安全に暮らすことの出来る空間で、ここも彼らが創造した世界

だ。

「ありがとう。願い通り、砂糖がすっかり入っている」

「おいおい、砂糖が入ってなかったら礼も言わないのかね」

「当然だ。注文と違う飲み物を出した喫茶店に君は礼を言うか？
それに君は、特に理由もないのに、忙しい身である私を呼び出した
という前歴の持ち主だからな」

「大げさだな」

「大げさで結構。君には対しては、多少大げさでなければ付き合えない」

デカラビアは子供らしからぬ大人びた口調で冗談交じりに言い、
安心した顔で再び紅茶を煽った。

フィーニクスも煙草を灰皿に落とし、コーヒーの入ったカップを
口元に運ぶ。

紅茶が半分ほど減ってから口から離し、「そう言えば」と前置き
してから、近況訊ねる。

「最近、こっちは何かあったかい？」

フィーニクスは、彼に似合わないため息を吐きながら答える。

「元老院の連中は相変わらずお堅い。態度だけでなく頭も固いから
付き合いつらくて仕方ないな」

「それは残念だな。友人関係に飢えた老人を助けてくれそうな、有望な若者はいないのか」

フィーニクスは眼鏡を外して、レンズを拭きながら、感情なく言う。

「連中が欲しいのは私の『名前』だけさ。『不滅の魔術師』という、古から存在する私の二つ名……奴らにとって価値があるのはそれだけだよ」

「人の世を離れた後も、俗世と変わらないことをしようとする愚か者の集団だからな。元老院というのは」

デカラビアが悪意たつぷりに評価を下す。

元老院は、上位種たちにとっての政府のようなものだ。

数多ある『世界』を渡ることの出来る彼らにとって、一つの『世界』の中でなら、神にも等しい存在になることも容易い。

しかし、世界へ過剰に干渉すると世界を滅ぼしかねない。世界は数多あるが無限ではない。無知な上位種が勝手なことを繰り返せば、世界は間の世界一つだけになってしまう。

故に元老院は、無闇に時空へ渡ることを防ぐべく、時空への『扉』を全て管理するようになった。元老院の許可を得た者以外が『扉』を有することは禁止し、時空を渡る際には、元老院の許可を必要とすることが決められたのだ。

他にも元老院がすることは数多くある。が、ここでは多く語らな

い。

共通の規律を作り、決まりを犯した者を罰する組織。それが元老院という組織の本質である。

「お題目は立派だが、内部では政争が絶えないんだろう？ 何を好きこのんで協力するんだ？」

元老院は、^{セフィラム}十神官と呼ばれる魔女たち十人を中心とする会議で運営されている。顔ぶれが変わったことは一人を除いてない。古いつても、世襲制である魔女のため、初代の魔女たちは一人もいない。現在の十神官全員、二代目以上の者たちだ。会議中こそは舌論が飛び交うが、彼らの関係は合う合わないは別にして、政争に発展するほどのものではない（と公言している）。

政争の火種は彼らの部下たちである^{チャネルス}補佐官たちだ。

彼らは賄賂や讒言などで神官たちを惑わし、少しでも組織内での地位を上げようと躍起になる。ほとんどの神官たちにそんなものは通用しないが、就任したばかりの若い神官が補佐官の言葉に惑わされてしまう例も少なからずあった。それによっておきた混乱は明記しないが、結果、過去唯一の神官除籍に繋がった。

現在はかなり内部の機構も改善されているが、水面下で争いが続いていることは周知の事実である。

フィーニクスは無表情だったが、声には明らかな疲れがあった。

「仕方ないさ。私の名前があるだけで向こう見ずな若者を、少しでも減らすことが出来れば……」と思えば、安いものさ」

「老人の鏡だな。涙を禁じえない」

「ありがとう」

感謝の言葉を述べた古の魔術師は、拭き終えた眼鏡を顔に掛ける。テーブルの上にあったコーヒーを取り、やや薄くなりつつある香りを楽しみながら飲み終えた。

「それはどうも」

幼い容姿の魔法使いも同じようにカップを煽り、紅茶を飲み終える。

「さて。もう何もないか？ なければこれで失礼するが」

フィーニクスは眼鏡の奥の鋭い目を閉じ、たっぷり一分経ってから、

「……………ああ、ないよ。またいずれ」

「……………難聴になったと思って心配したよ。何か思い出されて、やっかいな問題に巻き込まれたくないので、これで失礼するよ」

デカラビアはそう言って立ち上がり、その場を去ろうとした。

「デカラビア」

フィーニクスの呼び止める声が背中から聞こえたので、デカラビアは振り返る。

「なんだ」

うんざりした気持ちを隠しきれず、不機嫌な口調になる。

椅子から立ち上がったフィーニクスはデカラビアを見つめながら言う。

「非常に残念なのだけだね。元老院特別顧問官として、『選命の魔法使い』デカラビアを、世界干渉法違反の容疑で逮捕する」

* * * * *

特別顧問官は、名前だけの役職で権力自体はなにもない。ただ、就任できるのはフィーニクスのような永く生きる上位種のみである。「老人には丁度いい」と笑っていたことを思い出す。しかし、実権がないといって、元老院所属の上位種にある決まりがある。

それは、『法を犯した上位種は捕らえなければならない』。

「悪い冗談だな」

「冗談を言うのなら、もっと楽しい冗談を言っさ」

フィーニクスの口調は先ほどまでの他愛のない会話と変わらなかった。ただ、眼鏡の奥の鋭い瞳はどこか悲しそうである。

デカラビアは不敵な笑みを浮かべ、「フン」と鼻を鳴らした。笑みの形はそのまま、しかし苦々しく呟く。

「まんまとおびき寄せられたという訳か」

「どうしても言ってくれ。そして、罪を認めて捕まってくれないか」

デカラビアの笑みが、水に沈んでいく錨よりも早く消える。代わって顔に浮かんできたのは、怒りの表情だった。

「この偽善者がっ！ 本当の友人なら、どんな手を使ってでも救おうと考え、見逃したり、逃亡に手を借すものではないのか？」

「真の友人とは、自分の身を斬る思いで罪を告発し、更正させようとするものだよ」

フィーニクスが諭すようにデカラビアの理論を訂正する。

デカラビアはフィーニクスのすました顔を睨みつけ、話の流れを変えた。

「どうしてバレた？」

「『断罪の魔女』の調査のおかげさ」

「あの死神が……」

この場にいない魔女に対して悪態をついた魔法使いは、大きく舌打ちをした。

「で、私が大人しく捕まるとでも思うのか？」

「公私混同で言わせてもらうなら、手荒な真似はしたくない」

「残念ながら……」

デカラビアは形の良い唇を醜く歪め、両腕を大きく広げた、犯罪者である魔法使いは高らかに宣言する。

「私は手荒な手を使って逃げてやる！」

少年の足元に黄金色の五芒星の円陣が現われ、発光を始める。発光は徐々に強まり、小柄な魔法使いの身を包んだ。

「『顕現』」

フイーニクスは油断なくその現象を観察しつつ、誰にも聞こえない程の小さな声で呟く。

「人の姿を捨ててでも逃げたい……人間として当然かもしれないが……私は」

光がはじけ、デカラビアのいた場所には、奇妙な物体が浮かんでいた。

それは、厚みはほとんど感じられない、黄金の五芒星の円陣だった。星の真ん中の部分には、巨大な眼球が浮かんでいた。

眼球が映している男は呟きを終える。

「……非常に苦しい気持ちになるよ」

この男には珍しく、小さな声で本音を零した。

『顕現』。

普段は人として、仮の姿をとっている魔術師や魔法使いたちは、その内に巨大な力を有している。しかし、力を完全に使うには、人の器を維持することが出来ない。そのため、本来の力を使うのに適した異形の姿に変貌する術。

それが『顕現』である。

「ふむ、久しぶりにこの姿になったが、気分はいい」

デカラビアの声は、さっきまでの高い少年のものでなく奇妙な声となっていた。まるで、洞窟の奥から反響しているような声だ。

フィーニクスはやや俯きつつ、訊ねる。その声はどこか懇願するようなものだった。

「デカラビア。考え直さないかね？」

怒り心頭だった先ほどよりは、幾分落ち着いた態度でデカラビアは答える。

「いや、ここまでできてしまったら刃を交えずにはいられない。それに今更、刃を収めることは私の矜持に反する」

「そうか……ならば仕方ない。相手をしよう」

フィーニクスは両腕を交差させ、術を発動させようとする。

しかし、敵が術を発動させる隙を与えるはずもなく、現在、デカラビアの身体を構成している円陣が高速で回転する。そして、眼球の部分から攻撃——黄金の光線を繰り出した。

光線はフィーニクスのいる場所を直撃した。直撃時の衝撃は凄まじく、屋敷を半壊させるには十分だった。だが、異形の姿と化しているデカラビアは、顔があれば怪訝な表情を浮かべていただろう。

「……避けられた……当たってもいないな」

「正解」

遠くのほうでフィーニクスの澄み切った声がフィーニクスの耳に入る。

「やはり『顕現』されると、私がどんなに素早く術を発動しようとしても間に合わない、か」

『顕現』のメリットの一つに、術の発動を大幅に短縮することが出来る。いくらフィーニクスが術を素早く出そうとしても、『顕現』したデカラビアの術の発動に間に合わない。

眼球をひっくり返し、フィーニクスの姿をしっかりと確認するかのようにデカラビアは言う。

「フィーニクス。五秒だけ待ってやる。君も『顕現』するのなら今のうちだ」

デカラビアの言葉を挑発するような笑い声で、フィーニクスはその提案を拒否する。

「傲慢から来る余裕は、戦闘中では命取りになりかねないぞ」

「……それが君の答えなら、私はもう手を抜かない」

言葉が言い終わらないうちに、デカラビアの円陣は回転を始め、先ほどの光線を無数に発射する。それら全てが、フィーニクスのいる場所に向かって、一斉に襲いかかり、直撃、屋敷は完全に崩壊した。

霧よりも深い土埃が発生し、辺り一帯は黄土色に覆われる。

デカラビアはその場を一時離脱、フィーニクスの姿を探す。今の攻撃でも全く手応えを感じなかったのだ。

もしもこの状態で不意を突かれれば、例え『顕現』した状態でも非常に危険である。何せ、相手は古の時から生きる、『不滅の魔術師』なのだから。

「……………！　そこかっ」

僅かな気配を察知し、その方向に向かって、再び光線を無数に発射する。

光線が通過した部分だけ煙が晴れる。そして、大きな衝撃が発生し、ほとんどの土煙が吹き飛んだ。半壊状態だった屋敷は無数の光が突き刺さり、全壊、瓦礫の山となる。

そんな中で、唯一、僅かながらも瓦礫と化していない場所があった。

「……さすがだな、フィーニクス。いや『不滅の魔術師』」

そこにいたのは紅蓮の炎で黄金の光線から身を護る、炎のように赤い長髪を持つ男だった。

「デカラビア……いや、『選命の魔法使い』。君の实力はこんなものではない。捕まったときに言い訳をしたくなければ、悔いのないよう、この『不滅の魔術師』に君の本気をぶつけてみたまえ」

黄金の光線は炎に飲まれ、霧散、消失した。

「傲慢から来る余裕は、戦闘では命取りになるのではなかったのかね？」

デカラビアは皮肉を投げる。フィーニクスはその皮肉に、落ち着いた態度で答える。その態度は決して傲慢からでは生まれないということが、相対するデカラビアにも感じられた。

「私の余裕は傲慢からではない。これは君に対してのチャンスだ」

「……なんだと？」

デカラビアの声に不機嫌なものが混じる。

こいつは一体何を言っているんだ？

犯罪者である自分に逃げるチャンスを与えるなど、どうかしてい

る。

「もしも」

フィーニクスは言葉を続ける。

「そう、もしも君が私を、本気で、完膚無きまで叩きのめしたら……その時は君の言う、本当の友人としての行動を取ろう」

つまり、目の前の敵を倒せば、自分は捕まることなく、今まで通りに生きていける、と言うことが。

「逆を言えば……私が倒されれば、それは元老院に連れて行かれる、と考えていいのだな」

「ああ。私たちの立場が、よりわかりやすくなっただろう」

フィーニクスは炎の光で眼鏡を照らしながら、デカラビアに問う。

「どうかね」

「その条件、飲もう」

デカラビアの円陣が再び、回転を始める。その回転速度は、今までとは段違いだった。黄金の円盤のような姿のデカラビアは、先ほどの光線よりも遙かに細い——まるで金糸のようだ——を発射する。

それら全ては、フィーニクスには当たらず、地面に吸い込まれていく。

（わざと、だな）

今までとは一風変わった攻撃。ほぼ間違いなく、デカラビアの特殊な術、技——言葉はなんでもいい。

とにかく、相手の切り札には違いない。フィーニクスは油断なく、術を事前に発動させておく。術に関する攻撃を全て、自動的に防ぐ防御壁だ。先の攻撃もこれで防ぎきった。

直後、何かが大小の瓦礫を吹き飛ばし、フィーニクスに襲いかかる。事前に仕掛けた術は物理的には無効なので、瞬時に移動してこれを避ける。

（デカラビアの切り札は何かを召還することか？）

釈然としなかったが、この事柄は一時、保留する。

「…ふむ、たいしたものだ」

感嘆の言葉を口から漏らしたフィーニクスが見たのは、地面を隆起させながら現われる、土で出来た巨大な獅子だった。

それも一匹ではない。視認しただけでも十匹以上はいるだろう。

「なるほど…だが、君の二つ名には少々、不釣り合いだな」

「そんなことはない。私の二つ名は間違いなく『選命』以外にはありえないさ」

フィーニクスが声のした方に顔を向ける。そこは沈みかけた太陽を背にして浮かぶ、黄金の五芒星だった。

「周りを視てみたまえ、フィーニクス」

言われたとおりフィーニクスは周りを見回す。目だけでなく、感覚を研ぎ澄まし、気配で視る。

「……！ これは」

フィーニクスが感じ取ったものは、大量の『死』の臭いだった。

「わかったかね。私の力——『選命』の意味を」

上位種の二つ名とは、その人物を象徴する力や人柄、役割などが名称に使われる。ニックネーム、愛称のようなもので、よく相手を知らない、本当の名前がわからない場合などに二つ名は使われる。

つまり、二つ名はその上位種そのものと言っても、決して過言ではないものだ。

「そう。『選命』——『命を選ぶ』。これ以上、私に相應しい二つ名はあるまい」

「命を……こつもたやすく奪い、そして……与えることの出来る術、か」

フィーニクスは瓦礫の隙間に転がっていた小鳥を拾い上げる。小鳥はぴくりとも動かず、白濁しかかっている瞳を虚空に向けている。

いや、小鳥だけではない。研ぎ澄まされた感覚の中、大量の死が、辺り一面に発生している。

デカラビアの力、『選命』。

それは命なき物に命を与え、命を持つものからは奪うことができ。まさしく、命を自由に選ぶ権利を有する……『選命』の名前に相応しいものだった。

「残念なことに、この術は魔術師や魔法使いなど、同族には効果がないんだ。だから、安心してくれ」

「……それくらいの弱点がなければ、今まで大人しくしている理由はないだろうからね」

フィーニクスの表情は無表情だった。瞳を閉じていることから、黙祷でも捧げているのだろうか。

静かに怒っているのかもしれないが、デカラビア自身、自分の力は気に入らないものだ。仮に他人がこの力を有していれば、良い気分のものではない。

しかし、ある意味、以前の自分の経歴と含めれば妥当な力かもしれないが。

感傷を振り払うように、デカラビアはフィーニクスに向かって挑発する。

「さて、『不滅の魔術師』フィーニクス。命を終えたものたちに黙祷を捧げている時間があるならば、この状況を打開する術を探してはどうかね」

フィーニクスの周りには巨大な土の獅子たちが、いつでも襲いかかれるよう、徐々に間合いを詰めていつている。

「命があるということは縛りがあると言える。肉体があるとは限界があると言うこと。故に、」

土の獅子たちの身体は、突如現われた炎の蛇に巻き付かれ、燃え上がる。炎は暗くなり始めた空の背景とよく合い、そして映えた。

フィーニクスの黙祷と術は、静かに終わりを告げる。

「我は私の炎を燃やし続けるのみ」――」

* * * * *

「そう容易く狩れはしない、か」

特に落胆した様子もなく、デカラビアは言葉を漏らした。十分、許容――予想の範囲内である。

「勝負事だけではないが、何事も先を見通して手段を講じておくことは、自分を有利にする事ができる」

デカラビアは黄金の円陣を、再度回転させた。

燃やし尽くされた土の獅子の身体は、脆くも崩れ始める。

「む？」

フィーニクスが、状況の不審を感じ取った時、彼はすでにデカラビアの術中から逃れることはできなかった。

崩れた獅子の身体から、無数の土の矢が降りかかる。避けようと瞬間移動の術を行使する。

「？」

しかし、術が発動する気配がない。脚に目を向けると、そこにはごつごつした木の根が、蛇のように絡みついていた。締め付ける力の強さ、魔術が発動しないことから、デカラビアの術に間違いない。

フィーニクスは避けようにも避けられず、大地の矢が次々と身体に突き刺さっていった。

再び発生した土煙を払いのけ、デカラビアは自身が起こした惨状に目をやった。

「……フィーニクス」

男に無数の土の矢が突き刺さった、あたかも先鋭的な芸術のオブジェ——フィーニクスの姿を確認する。

「惨めなものだ。だが恥ずかしく思うことはない。君は『顕現』しなかった。この時点で、私は君に対して、大きなアドバンテージを取っていたんだ。私の勝利は君が本気を出さなかった時点で、確定事項だったんだよ」

デカラビアは優しくそう語りかける。

「確かにそのようだ。君のことを少々、甘く見ていた」

フィーニクスの身体には数多の異物が刺さっている。不自然なことに血は一滴も出ておらず、言葉にも濁りがなかった。

「『不滅の魔術師』フィーニクス。約束通り、私は逃げることにするよ」

デカラビアの巨大な眼球を見つめ、フィーニクスは口元を崩した。諦めとは違う、精気溢れた笑顔だった。

追いつめられ、いやすでに敗北が確定的である、この状況ではそぐわない表情だった。

「『大人』が悪いことをした『子供』をしっかりと叱ってやらなければならぬと思わないかね？」

「……確かにそうだが、その理屈から言えば、私の勝利は万に一つもあり得ないということになるのだが？　かなりずるいことじゃないかね？」

デカラビアの正当な抗議に、フィーニクスは返答する。

「その通り。『大人』はずるく、卑怯者だよ」

フィーニクスの身体が炎に飲まれ、見えなくなった。

熱気を伴った衝撃波がデカラビアを襲う。といっても、かなりの距離があつたのでダメージを受けることはなかった。

むしろ、デカラビアの心臓、いや、心は早鐘のように絶え間なく鳴っていた。

あのフィーニクスが、『自殺』という選択肢を選ぶはずがない。となれば、奴は自分の術を抜け出して、ここから反撃に出るはずだ。

フィーニクスの二つ名である『不滅』の術とは、一体どのようなものなのか……デカラビアには推測はできても、具体的にどのような『術』かは確信に至れなかった。

「……………くそっ！」

未知の術を使う相手と敵対することは、極力避けるべきという常識がある。

それは当然の事で、想定外の事態が敗北の原因となる戦闘となれば、そのまま命の危機にへとつながる。

態度や言葉から、本気で自分を殺そうとしているとは思えないが……。

そこまで考えを進めていたデカラビアの眼球が炎に包まれ、地面に音を立てて落ちていく。

痛みは感じない。そもそも、『顕現』した状態の眼球は術を発動するための飾りのようなもので、本来の眼球とは役割が違う。

そう、術の発動に必要なものだったのだ。

相手に悟られず、それをピンポイントで破壊するとは……！ しかもどうやって？

「君の動揺が手に取るようにわかるよ。これで術の発動に手間取るはずだね」

「！」

つまり、奴はその事を知った上で眼球を攻撃したのだ。

「くっ」

五芒星の円陣のみとなったデカラビアは、短い悪態を漏らしつつ、素早く移動を開始する。一つの場所に止まり続けることは非常に危険である。もっとも、相手の攻撃手段がわからないため、どの程度効果があるかはわからないが。

「残念ながら、どんなに逃げても私の『術』からは逃れることはできない」

フィーニクスの声が、どこからともなく耳に入ってくる。デカラビアの黄金の円陣が乱れた。恐怖に身を震わせたのだ。

「私は本気で君を狩りにいく。故にヒントも何も与えず、黙々と攻

撃だけを出し続ける。覚悟してくれ」

魔術師の慈悲無き宣言の後、デカラビアの円陣全てが炎に包まれる。それもただの炎ではない。五芒星が溶け始めていた、容赦なき紅蓮の炎によって。

デカラビアは、どこから降りかかってくるかわからない炎の嵐に、ただ叫び声を出すしかできず、意識は混濁していき消失した。

* * * * *

デカラビアが目を覚ますと、屋敷の瓦礫の横で寝ていた。すでに空は黄昏色に染まり始めている。服は端々が焦げており、星形のアクセサリーも熱によって歪んでいた。確認できないが、身体中煤によって汚れまみれだろう。目線に移すと、煙草を吸っているフィーニクスの姿があった。

「私の……完敗か」

デカラビアは自嘲気味に、小さな声で言った。フィーニクスは煙草の煙を輪にして吐き出して、こちらも独り言のように呟く。

「ああ、そうだね」

目線は空を見上げていたが、意識は間違いなくデカラビアの方を向いていた。

「デカラビア、一つ教えてくれるかい？」

「何をだ」

「何故、一つの世界にむやみやたら干渉し、滅びへの道を歩ませようとしたのか」

デカラビアは、まるでイタズラがばれてしまった子供のような、罰の悪い顔をした。同時に、どこか諦めの色もあった。

「君はその『世界』がどういう世界だったのか……知っているかい」
「知っているが、君の口から聞きたい」

「……その『世界』では、人が機械を支配していた。その機械には人工知能が備わっていて、核には動物の脳が使われていた。……つまり、人間とほとんど同じ、精神を宿していたんだ。——人は機械に頼らないと生きていけないような、脆弱な存在だった」

そこまで話をしたデカラビアの瞳に、怒りが走る。語気も強く、荒くなっていた。

「だが！ それにもかかわらず、人は機械に対して尊敬も感謝の念も払わず、消費物としてしか見ていなかった！ 挙げ句の果てに、」

「ある生物反乱の原因が、全て機械の思考回路のせいにされ、危険物として大量に廃棄されようとした。本当は、使っていた人間のミスが原因なのに」

フィーニクスがデカラビアの言葉を引き継いで、静かに言った。
デカラビアはその落ち着いた声を聞くと、息を一つ吐き出した。

吸い終えた煙草を瓦礫の方にへと放り、新しい煙草をくわえ火

を付ける。

「たしか君は元々、ある機械の思考回路が、魔法使いになる前の姿だったな。そのあたりが原因か。その『世界』の機械たちに肩入れし、人を支配するように唆したのは」

「単純な理由だろう？ 自分の境遇と重ねてしまったのさ」

「しかし、君は誰に言われるでもなく、自身に冤罪がかかったとき、人々に対して反乱、果ては虐殺までしたからね」

フィーニクスはそう言うと、倒れ込んだままのデカラビアに対して手を差し出す。デカラビアはそれを確認しつつも、無視して訊ねる。

「で、私をどうする？ この場で処分するか？ 元老院に連れて行って裁くか？ ……どちらにせよ結末は同じだが」

フィーニクスは煙草を吸いながら、大したことではないように、自身の真意を明かす。

「いや、君を裁く必要はない」

「何？ それは一体どういう……」

「実はね、君の罪を知っているのは、私と君以外では『断罪の魔女』しかない。彼女とは古い友人でね。今回の件は、私以外には黙っておくようにと約束したんだ。変わり者だが、約束は破らない性格だから、安心してくれて構わない。彼女自身、『戦狼の魔術師』のように、仕事に熱心ではないからね」

フィーニクスがニヤリと笑う。彼が気取らない純粹な笑みを、デカラビアはこの時初めて見た。

彼が眼鏡を少し直した時には、すでに笑みは消え、いつもの皮肉気な表情を張り付かせていた。

デカラビアは呆然とした顔で、フィーニクスの顔を見つめた。そしてどもりながら訊ねる。

「な、ならば、さっきの私たちの戦いは？ 全て、茶番だったというのか？」

心から信じられないという気持ちだが、言葉からもわかった。

「いや、ちゃんと意味はあった。君の本音を聞き出せたという、貴重な収穫がね」

悪びれた様子もなく、フィーニクスはすました顔で煙草を燻らせる。一方のデカラビアは恥ずかしいやら悔しいやらで、寝ころんだ状態のまま、地団駄しかねない雰囲気だった。

フィーニクスが「そうそう」と言っ、手をポンと叩く。

「ところで……君に一つ、頼み事があるのだが？」

「なんだ？ これ以上、何があるの？」

デカラビアはイライラした調子で先を促す。

「しばらくの間、私の助手として元老院で働いてくれないか？」

「……………は？」

言葉の内容を完全に理解するのに、たつぷり一分はかかった。理解すると同時にそれは怒声にへと変換される。

「な、なぜ、私が……………！」

「その代わり、君の『罪』について黙ってあげよう。干渉した『世界』を修復する時間も十分に与える。ついでにこの辺り一帯の修復を頼むよ。存分にこれらの罪をもみ消すがいいさ。私の出した条件をのんでくれればね」

ぽかんと口を開けたまま、デカラビアの口は金魚のようにパクパクと開閉を繰り返す。やつのことで震える口を必死に動かす。やや呂律が回っていない。

「お、お前……………もしかして、それが狙いだっただのかっ！？ 私をこき使ったために、こんな茶番を……………！」

その問いには何も答えず、フィーニクスが手を差し伸べた。

「友人関係に飢えた老人を助けてくれないか、前途有望な若者よ」

怒りと羞恥が込められた目で、手の主を睨み、悪態を吐きながら、少年は差し出された手を握った。

手の主の目は鋭いが、どこか微笑んでいるようにも見え、少年の目元には何か光ものが見えた。

空に目を向けると、太陽は完全に沈み、月が昇り始めていた。雲の間からは星が煌めき、夜の始まりを告げている。

月は自ら輝くことはできない。逆に星は太陽と同じように自分で輝いている。太陽に至っては見えることもない。

だが――

「さて。さつさと立ちたまえ。これからやる事は山ほどあるぞ」

「ちよつ、まつ……ていうか、子供相手と言うなら、少しは手加減しろ。大人げない」

「さつきも言ったと思うが、大人はずるいのだよ」

哀れにもこの小さな星は、この時、大きな炎の背を追っていくしかできなかった。

幕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5276i/>

炎に照らされる星

2010年10月28日03時10分発行